

平成十九年四月一日発行 第十七巻第四号 通巻第一九〇号 毎月一回 一日発行
平成二年九月十八日第二種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成19年4月号



牡丹焚く

高橋将夫

一本の藁一輪の冬牡丹

枯蓮の動いてゐたる亀の道

日の中に浮んでゐたる仏の座

それぞれに一家言ある干大根

朴落葉浮世の風に回りをり
魂も一人歩きの大枯野
驚きの潤目鱗のまなこかな
枝の数競ふ冬木の桜かな
たつ鳥の羽音の沈む冬の沼
枯蔓の意地のからまり具合かな
静けさは火の中にあり牡丹焚く

砂丘

松原 仲子

立春の土もり上がる歓喜かも
早春の砂丘に石の二つほど
浅春の海をまたぎし橋の朱
なにもかも靄の中なる春の船
春夕べ水平線の傾きに
砂浜に春光あふるるうねりかな
うららかや砂丘の涯はたて探しゐる
流木に目鼻のありて春渚
大亀に誘はれてゐて黄砂降る
青年の赤き鉢巻春北風

特別作品

月よりの風のつよさよシクラメン
如月や水面ひかりて番鳥
鳥の尾の水面を叩く春あした
切崖や土の匂ひのすみれ草
春嵐胸中の川静かなる
太白や浅き流れを亀鳴きて
風紋の消ゆることなき西行忌
初蝶の飛ぶにはまだき野面かな
春の星宇宙拡がりぬたりけり
行く春のひかりの渦や堆砂垣

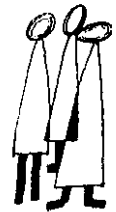
槐安集

市場基巳

板前の師走の動き追ふ目して
たちまちに眼が見開きて冬鱈
さざんかの花卉ふんで鮪届く
回廊の葉の落ちすぎて汚れをり
桐の実の高鳴る空の大いらか

水野恒彦

寒林を抜け少年の匂ひ出す
白鳥の翼は濡れて光体に
冬かげろう巫女舞の刻はるかかな
霜柱踏みゆくときの血は淨し
睨み鯛酔うてひとりの夜空あり



延広禎一

水切の飛んで補陀落冬の虹
九穴に魂それぞれや独楽廻る
永切水面に小石を投げ飛び跳ねる興す
金罽と浮世絵のある女正月
寒声を闇に放てり金剛杵
鳩省二に会ひし貌をして

加藤みき

ぎんねずの蓬の波の大河原
寒靄や草にのりたる水の玉
遠吠えの獣か風か冬青の実
瑠璃紺の闇より水音春隣
待春やかたづけをる机の辺

石脇みはる

鳥の辺の水かげろふのたちにはり
ひと通りゆく日の中の御行かな
大王松追羽根乗つてしまひけり
菜の花にうづもれてゆくからだかな
ならやひの声聞にあり紀伊の国

中島陽華

天狗待つ間の鍋の毛布かな
マラ川のヌーの渡りかお燈の火
松の根方の鬼打木消えてをり
餅花や筑波嶺遙かにしたるなり
蠟梅やももいろの寿衣縫うてをり

竹内悦子

緋蕪を提げて梅町あたりかな
手毬つく明治生れの妣のこゑ
工場の音のとぎれし猫の恋
菜の花や雨の真昼となりける
松のこと松に習ひし雀の子

栗栖恵通子

太白の昼見ゆ春の立ちにけり
きさらぎの辛味大根擦りにける
あきらかに鬼の泣きたる春氷
涅槃図の余白に月の出でにける
じやらじやらとじらしてゐたり春の宵

大島翠木

初声の鴨よ千両食べてゆけ
川底に砂もぐる魚小正月
くすり喰浮き巢の揺れの光かな
しがらみを割る寒卵冲冥し
涅槃雪もて皮靴を拭きをれば

雨村敏子

朱袋の安産の札納めけり
年の火や命いのちの継がれつつ
櫛やDNAは神のもの
柵を打つ志功の菩薩寒の雨
白筆の寒九の水を含みけり

黒田咲子

草の径歩きて素直なる今年
正月やかいつむりゐる池に出て
風除けの立木に寄れば番鳩
山麓へ冬芽起しの風つのる
丹精の白梅ならむちらほらと

小形さとる

またひとつ年逝く白身魚かな
外濠に齒ぐきの男冬ぬくし
冬たんぽぽ膝が喜ぶ遊びして
貞操といふ仄かなる粥の湯気
曾根崎に片袖濡らす年のくれ

天野きく江

くるくると匙で混ぜ込む初日かな
初景色 二礼して発つ 明鴉
鷓鴣寡黙の木々にもの言ふて
レトロかな枇杷の花抜け水飲み
切つても切つても鬆のある赫蕪

本多俊子

椰なげの葉を鏡のうらに淑気かな
ひたすらに背すじを伸す寒茜
その赤をいのちの色に萬年青の実
天地のくつきり梅の開きけり
俳諧の犀畏みて冬深し

えんじゅさろんから

中島陽華

二〇〇七年を迎えて始めてのえんじゅさろんだ。いつもの面々が全員出席。ビールもないのに割箸が全員に用意されているのでなにごとかと思つたら、なんとYさんの奥さんのお手製の、正月の縁起ものとしての、宇和島の「福細」を頂戴すること。糸こんの空炒り煮に鯛でんぶ、浅葱、蜜柑の皮の黄色とこらだけみじん切りにして戴く前に混ぜ合わせる。香り高く口当りが良いから大人にも子供にも、きつと受けがよいことだろう。初出より初物を戴いて、いやはや目出度い、目出度い。

主宰は本年の挨拶と、奥の細道に隠されたものという題名で作家の桐野作人が発表した文に対しての所見を述べられ、ついで竹中一花さんが受験された京都・観光文化検定試験二級の試験問題などで軽く遊び、いま、課題として勉強している長谷川權「古池に蛙は飛び込んだか」に入った。蕉風開眼という章である。そのまま引用すると

古池や蛙飛び込む水の音

芭蕉

ある春の日芭蕉は蛙が水に飛び込む音を聞いて古池を思い浮かべた。すなわち、古池の句の、蛙が水に飛び込む音は現実の音であるが、「古池」はどこかにある現実の池ではなく、芭蕉の心の中に現れた想像の古池である。とすると、この句は「古池に蛙が飛び込んで水の音がした」という意味ではなく、「蛙が飛び込む水の音を聞いて心の中に古池の幻が浮かんだ」という句になる。一つの音が心の世界を開いた瞬間から旧風を脱し、自らの句風に目覚めて蕉風開眼に至ったと。納得、納得。そのほか延広さんの調べによる芭蕉の句に対する山本健吉さんのことばなどをひもとき充実した一日であった。

槐市集

近藤喜子

吹き晴れや雪嶺しづかなるオーラ
冬草や心髓いつも燃えてをり
張りつめし空ひび割れる斧始め
そして誰も居なくなりたる雪達磨
暗闇の奥に奥あり霜あかり

柴田靖子

彼方より欲望の波年新た
いたけだかに時に優しく寒鳥
光の精波上に乱舞し春近し
万両や寂寞の庭に火を灯し
和太鼓や急に広がる雪景色

鈴木勢津子

初夢に遊泳したる島宇宙
ふるるうん黄身もり上がる寒卵
月光に眠れずにゐる室の花
万物の墓標でありし雪景色
業平の夜越しの山も眠りけり

瀬川公馨

いつてえぜんてい持ち重りせる暮の垢
室に入り室を出でたる冬霞
晦日蕎麦外伝盗み読みしたり
版下を作つてゐたる師走かな
猫足の手焙買ふてゐたりけり



槐集

高橋将夫選

岡崎

近藤 喜子

枚方

谷村 幸子

一花なり日をいただきし凍鶴は
天上へいつかは還る根雪かな
寂しくて輝きたくて滝氷る
かつては太陽だつたと雪をんな
空腹のさやかなるとき涅槃かな
初明り戸を操る手より流れけり

枚方

中野 京子

岡崎

岩月優美子

初日の出だんだん軽く上がりける
みくじ引く一瞬なりし仏の座
身の丈の仏頭一月の茜色
冬の闇はひのぼる山火かな
楯の洞春兆す風抱きみゐて
初東風に百済観音笑みたまふ
大蘇鉄寒九の雨にかがやける
風花や朝のスープは琥珀色
いいことのあるさう冬の翡翠よ

近藤きくえ

京都

竹中 一花

山門の箴しんげん言げんうすれ桜の芽
大扉あけし若僧春の風
初あかね乾に愛宕近く見ゆ
釜鳴りの神事を拝す寒日和
袖垣に水音ありけり寒椿
初夢や碑礫貝に乗り女神来る
寒星にフアドの歌声響き合ふ
あるときはノラになりたや寒牡丹
巨いなる板根に満つる淑気かな
四温光小蟹の巢穴突きをり
錆色の着物の男初糸びす
柚子の香をまとうて去りし愛宕かな
カントォーネ遠くに流る窓に雪
雪雲ゆきぐもへ昇る御魂よ観世音
北の峰南の峰へ鱒起し

銀河往来 高橋将夫

がて満開の花をつける。消えゆくものと生まれるものの調和の世界がそこにある。

◇「槐集」観照

寂しくて輝きたくて滝水る 近藤 喜子
凍滝がきらきらと輝いている。作者は寂しくて、寂しさゆえに生き生きと輝きたかった滝の思いをそこに見ている。それにしても、輝きたい思いの結果が凍結とはシニカル。

「て」は因果を含むから避けた方がよいと一般に言われている。「て」が多用されがちなのは、「条件」「原因、理由」等を示す接続助詞、終助詞、格助詞など用法が多様なせいもあると思う。いずれにせよ、時と場合で、掲句では自然に納まっている。

初日の出だんだん軽く上がりける 中野 京子

東の空が明らかにできてから太陽が顔をだすまで、初日の出を待つ身には実に長く感じられる。しかし、一旦見え出すと、しばらく止まっただけでほしくらいなのに、どんどん昇っていく。そんな状況を「だんだん軽く」と捉えているところが手柄。大いに納得させられる。

楯の洞春兆す風抱きぬて 近藤きくえ

春風が楯の洞と作者をあたたかく包む情景が鮮やかにみえてくる。「春兆す風」と「抱きぬて」からやわらかな風に対する作者の思いがよく伝わってくる。

山門の箴言うすれ桜の芽 谷村 幸子

箴言は戒めの言葉。山門に書いてある箴言が薄く読みにくくなっている。どこか由緒のある古いお寺であろう。桜の芽はや

初夢や碑礫貝に乗り女神来る 岩月優美子

等身大の貝に立っているニソフの有名な油絵を彷彿とさせる。碑礫貝であるところが俳諧といえよう。それにしても、なんとも若若しい初夢。作者の精神年齢がそれとなく窺えてうらやましいかぎり。

北の峰南の峰へ鯺起し 竹中 一花

鯺起しはもともと北陸地方の沿岸や佐渡などで用いられた季語という。北アルプス、白山連邦といった山並みを背景とする雄大な雪景色が連想される。

人間に根つこありけり竜の玉 近藤 公子

人間にも根があるという。「精も根も尽き果てる」というし、「根つからの江戸っ子」などとも言っているからには根があつて何の不思議もない。竜の玉というと、ついつい髭や玉に目がいくが、当然根もあるわけである。根本は看過されやすい。

ぼつかりと夢の入口山眠る 十川たかし

山はどんな夢を見ながら眠っているのだろうか。山頂あたりにはぼつかり開いた穴が見えてきそう。

土器が出てただの枯野でなくなりぬ 久保東海司

土器が出たからさあ大変。ひよっとしたら太古の遺跡が眠っているかもしれない。俄然周囲があわただしくなってきた。こうなる枯野もただの枯野ではすまされない。そうは言っても、紛れも無く枯野なのである。(以下略)